



## 久留島武彦の口演童話観の整理と検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花坂, 歩 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000141">https://doi.org/10.32150/0002000141</a>

# 久留島武彦の口演童話観の整理と検討

花坂 歩

## 一 はじめに

本稿で取り上げる「久留島武彦」(ぐるしま たけひこ)は明治に生まれ、大正・昭和を生きた口演童話家である。

「口演」は、一般的には、講談や落語、浪曲などを語って演じること、またそのような演芸を意味する。本稿で取り上げる「口演童話」はそれとは異なり、「単純に文字になったものを改めて口語りに直して語ったのではなく、テレビやラジオがない時代に、日本各地に出歩き新知識を含んだ「お話」を聴かせる専門的な活動」(金、二〇一三、一三〇頁)のことである。この他、中村(二〇一九)によれば「講堂や演舞場、野外などの大会場に数百人、時に千人規模の子どもたちが集められたこと、集かが保たれるよう身ぶり手ぶりで雄弁術的に語られたこと、舞台設営や語り手のあらたまった服装のような工夫があったことなど、アメリカの図書館で児童サービスとして一九世紀末から試みられたストーリーテリングとは様子がかなり異なる」(一八頁)のようにも説明される。

久留島武彦を史的に考察したものはすでに多くある。特に、勢家肇による史料の収集(注1)、後藤惣一らによる史料の整

理・考察(注2)、金成妍による史的考察(注3)は圧倒的で、「久留島武彦」を直接の対象にしたさらなる調査研究は一般会への貢献レベルにおいては不要に思われるほどである。そうした中で、本稿は「久留島武彦」の口演童話を中心に取り上げ、声の文化の発展に向けての基礎的考察を行っていくとするものである。久留島は、マイクも使わずに、「数百人、時に千人規模の子どもたち」を魅了したとされている。機器が発達した令和の時代においては、そのような能力の発揮の場もないと思われるが、どのような身体であれば、それが可能なのか、素朴に気になるところである。併せて、郷土学習材として、「久留島武彦」は多くの教材価値を有している。その偉人性については右記の先行研究に詳しい。本稿においては、久留島の児童観や童話観、口演童話観を整理することで、魅了する語りについての考察を深めたい。

## 二 久留島武彦について

久留島武彦は一八七四年に大分県玖珠郡森町(現・玖珠町)に生まれる。久留島は大分中学(現・大分県立大分上野丘高等

学校)に入学し、そこで、アメリカ人宣教師で英語教師のウェンライトの影響を強く受けることとなる。その後、そのウェンライトの転勤とともに、関西学院に転校、同校を卒業する。一九〇三年、二九歳の時に、初の口演童話会を開催。日本全国で口演童話活動を行うようになる。ポークスカウトの普及にも関わり、一九二四年には、デンマークで行われたポークスカウトの第二回世界ジャンボリーに、日本の派遣団副団長として参加した。一九五二年、全国童話人協会を設立。一九五四年、「全日本移動教室連盟」の初代会長となる(五八年に「青少年文化センター」に、七〇年に「財団法人日本青少年文化センター」に改称。二〇一三年には公益財団法人になる)。一九五八年、児童文化の向上に貢献したことによって紫綬褒章を授章した。一九六〇年没、享年八十六。

### 三 久留島武彦の児童観・童話観

久留島はその心身によって何を実現しようとしていたのか。二九歳の若さで開催した口演童話会、ポークスカウトの普及、全国童話人協会の設立、日本青少年文化センターの初代会長などの足跡からは幅広く児童文化活動の普及・発展を志していたことがわかる。

久留島は子どもにとって「童話は哲学」と述べる(久留島、一九二八、二七頁)。

常に自己がそれを求め、そうしてそのものになる、そのものが自己であると解釈する。ここに童話の子供に与える精神的効果が非常に強いものである、あるいは恐ろしいものであるということを考えざるを得ないのであります。これがあるから私どもは童話は大人の文芸と同じには解釈されない、子供には童話は哲学であります。子供の人生観をこれで開くものであります。

久留島の作品を見ると、「子供に与える精神的効果」を考えていたことがすぐにわかる。例えば、久留島による『すずむし』というお話には、「たくさん しゅぎょうを つむことじやないっしようけんめい がんばれば、きつと よい音が 出るじやろう」とあったり、『トラの子ウーちゃん』には、「おかあさんの いいつけを ちゃんと まもるようになりました」とあったり、『ともがき』には、「ひとりぼっち だった カラスが 森の みんなと たすけあい、なかのよい ともがきに なった おはなしは、これで おしまい」とあったりする。いずれにも明確な道徳教育性が読み取れる(注4)

こうした明確な道徳教育性とも言うべき特質は、久留島が掲げた桃太郎主義の教育との関連からも推察できる。桃太郎主義の内容は提唱者によって異なるが、簡易にまとめれば、鬼をも

倒す強さ・たくましさ、弱きものへの慈愛、他者と助け合う共同性を掲げる教育思想である。久留島は自身が園長を務めた早蕨（さわらみ）幼稚園でこの桃太郎主義の教育を実践した。大分県立先哲資料館編（二〇〇四）によれば、大正自由教育の時代、「久留島は、この自由教育は、一步間違えば自由放任に陥るものであり、このような教育は規律を尊ばず、放縱に流れやすくなるから、子どもの成長に弊害をもたらすものであるとして、これを軟派教育と批判した。そして団体的訓練によるしつけや共同生活による共感覚の育成を厳しく行うことに力点を置く硬派教育をとるべきだとして園児の教育に臨んだ」（二四三頁）とある。こうした「硬派教育」の姿勢は、ともすれば、軍国主義的・侵略主義的な教育への加担とも解されようが、「早蕨幼稚園における保育の主眼や具体的な実践において、あるいは久留島自身の保育に関する多くの著述のどこを読んで見ても、そのような侵略主義的なものは皆無に近い」（前出、一四四頁）とも述べる。この点については、第五節にて改めて取り上げることとする。

#### 四 語りについて

童話を語る上で、久留島は「心が直接に心に語る語り方」、「心が声に現われて耳を通して語る語り方」、「心が姿に現われて、目を通して聞かしむるところの語り方」の三つがあると云う（久

留島、一九二八、四二頁）。それらは順に、「相手の心」、「相手の耳」、「相手の目」に語る語りであり、いずれも「心」を主語にしての語りである。

まず、「心が直接に心に語る語り方」についてである。

久留島（一九二八、四七頁）では、「響き」は「耳に語ると同時に、心に語るところの言葉」のように説かれている。この「響き」は、「偽るべからざるところの赤裸々性」、「要するに誠意であります、要するに心で語るのであります」（久留島、一九二八、五四〜五五頁）、「そのまま心に感応するところの直接のはたらきをする言葉」（久留島、一九二八、九一頁）のようにも説明されている。

講演の記録も含めれば多くの言説が残る久留島であるが、特に対象を子どもに限定して述べた以下の言説がある（久留島、一九二五、一頁）。

子供に話す第一の心得は、言葉で話す、材料で話す、組み立てで話すなど、いふ考から一切放れて、真に心で話す真心中で話すといふ覚悟に立たねばならぬ。

ここでは、特に、「真に心で話す真心中で話すといふ覚悟」という言い方をしている。また、別のところでは、次のようにも述べている（久留島、一九二八、五一頁）。

子供は直覚力の強いものでありますから、非常に純真なる心を持つているから、言葉よりも響きの方を強く受け取る、その響きは心が充実して真に語らざるを得ない、真にそう思う、明確なる充実性をもって現われる心のはたらきであるとして充分に響きを持つが、子供の心に不安、不明、不確実なる立場をもって話すと、子供の心が絶えずそのために不安を感じる、不確実なことを感ずるのであります。

また、語り手の態度ということに関しては、以下のようにも述べている（久留島、一九二八、四四頁）。

その言葉はわからぬけれども、その調子、その取り扱い方が、直接に子供の心に感ぜしめることが出来る。大変、先生は興奮して話しておられたが、なぜそう興奮したのである。いわゆる知識的には理解出来ないけれども、子供の心には感じ得ることだと思ふ。

久留島は「誠意」とも言い、「真に心で話す真心」とも言い、「真にそう思う、明確なる充実性」とも言う。そして、「言葉で話す、材料で話す、組み立てて話すなどといふ考から一切放れて」とも言う。

次に、「心が声に現われて耳を通して語る語り方」についてである。「心」の音声上の現れについては、久留島（一九一六）では、「面白味」「光彩」「価値」と言い、久留島（一九二八）では「調子」といった言葉で言ったりもしている。いずれも、音声表現上の技術にとどまらない豊饒さを意図するものである。さらに、久留島（一九一六）では、言葉に「調子」がないものについては、「言葉に調子がなくても、引用者による中略、勿論、説明すると云ふことは出来る。（中略）が矢張り人を動かすと云ふことになれば、遂に無効である、駄目である、つまらぬものである」（二二六―二二七頁）とも述べている。一般に、「調子」と言えば、高低、速さ、リズム、強弱などを表すが、そうした物理的な現象のみを指していないことは明らかである。また、例えば、以下のように、子どもの感性に添わせて言い回しを変化させることの重要性も述べている（久留島、一九三四、二五九頁）。

「お父さん、どうして桐の葉が落ちるの？」

「桐は秋になれば落ちるのが當前です」

これでは聲にリズムもありませぬ。響もない。子供の求めるのは直理ではない。リズムである。それを

「桐がおゝ寒い、随分長い夏の間働いて坊っちゃん達に木陰を作つてやつた、もうお腹も空いたから一寸休まう、あゝ

草臥れた、枝からばらつと落ちて、ひらくく、あゝ好い心持だ、ひらくく。」

是で子供は首を伸ばして誠に満足する。

三つめとして、「心が姿に現われて、目を通して聞かしむるところの語り方」についてである。久留島（一九二八、一一七頁）には以下のようにある。

子供に話す時の態度、すなわち子供の目に映るところの話し方は私は二つの中軸があると思う。結論から先に申し上げますが、一つは肩であります。一つは腰の決めようであります。肩の扱い方と一つは腰の決めようであります。この二つが大きい会場に対しても小さい場所に対しても、両面に最も考えなければならぬ中軸だと思ふ。

マイクに頼らず、身一つで、多くの人数に声を響き渡らせた久留島は、「肩」と「腰」の決めようが重要だと言う。その「肩」のあり方については、呼吸との関連で説かれている。

久留島（一九二八）は、「一番考えなければならぬ問題は、呼吸問題」（五六頁）とし、「私どもは肺臓の上まで一呼吸でもって空気を入れておらぬ、三分の一位いを始終動かしているに過ぎない」（五六頁）、「胸で呼吸するつもりでするな、下腹でする

ようにしろ」（六三頁）、「呼吸の調節は身の構えということが一番必要であります」（六三頁）と述べている。こうした考えは、この言説から一二年遡る久留島（一九一六）で、「こゝに於て咽喉以外の聲の本来となるべきものがなければならぬ。それは云ふ迄もなく、肺臓の活動に依つて起る呼吸であつて、これを第一に注意せねばならぬ」（一九三〇頁）と述べたときから変わっていない。

こうした呼吸の重要性を踏まえ、以下の久留島（一九二八、六六頁）を読むと、姿勢と呼吸の関係がよりいっそう理解でき

る。

これ等のことを考え合わせても、演壇上の姿勢は最も自己の呼吸を調節するに楽な、自己が自分を語り得るような、生理的な、そうして地歩的な立場を取るといふことが必要であろうと思ふ。それはまず顎を引くということが第一、その次には肩を張ることあります。これは非常に呼吸をしやすくすると同時に、肩に意識がはたらくといふと、自然に呼吸が大きくならざるを得ない、肩に心をつけなければならぬという考えを持つと、自然胸を張る気分になり、自然呼吸が大きくなるのであります。

この言説から、「姿勢」については、呼吸が、楽に、大きくな

るよう、下腹で支え、胸を張る気分の状態に定めるものであることがわかる。なお、身ぶり手ぶりについては、「手足を使ふことを避けやうとするよりは、如何にして身體全部を使用すべきかを考ふべきではあるまいか」（久留島、一九一六、五五頁）のように述べている。

## 五 「久留島武彦」にある語られぬ足跡

第三節では、久留島の言説には侵略主義的なものは皆無に近いという大分県立先哲資料館による見解を紹介した。その一方で、侵略主義への加担と解釈されうる史実がないわけではない。主には、社団法人日本少国民文化協会（以下、少文協）との関わりである。

少文協は、昭和一六（一九四一）年一二月に設立された児童文化分野の国策協力団体である。久留島はその童話部会の初代幹事長を務めていたようである。中村（二〇一七）は、『日本少国民文化協会会報』（以下『会報』）に掲載されている童話部会の関連記事をつぶさに取り上げ、童話部会の国策協力の実際を検討している。以下は、中村（二〇一七）に示された年表をもとに、稿者が久留島武彦の名が明記されていたものを取り上げ、まとめたものである。

一九四二年の『会報』四号には、久留島が、富山、金沢、

福井に趣き、「少国民文化講習会」にて講演したとある。一九四三年の『会報』八号には、戦時食料確保の運動への協力のために組織された大学生・師範学校生らに、幹事長である久留島武彦が激励したとある。一九四三年の『会報』一〇号では、「童話部会の決戦即応」が告知される。食糧増産、戦意昂揚など、戦力増強に役立つ主題を重点的に取り上げることが求められる。久留島も「戦う童話の姿」という講演を行う。一九四四年の『会報』一四号では久留島が「決戦童話講座」、「決戦童話研究会」を開催したとある。

中村はその結論として、『会報』掲載記事の整理から、童話部会が戦力増強の国策に役立つ主題を積極的に取り上げ、少文協において中心的役割をはたすようになった経過が明らかになった（一六二頁）と述べている。また、中村（二〇一六）では、「口演童話には草創期からナショナリズムに沿う形で発達し、第二次世界大戦前・戦中期には戦意昂揚に貢献する手段と化する歴史があつたため、そのような思想面を含めての評価は、戦争責任をどう評価するかという観点と通じ合うものがある」（一〇〇頁）とも述べている。実際、明治四〇年に書かれた久留島による児童劇「新桃太郎」の台本を見ると、桃太郎が鬼ヶ島に出发する際の私たちは、「勇ましい洋装の扮装で、肩からは剣をかけ、背中には外套をつけて、両袖をはね、白い鳥の毛に飾ら

れた帽子を被り、短袴に飾靴を着て出て来る」と書かれている（注5）。これではまるで明治期の陸軍武官の正装である。当時の子どもたちが親近感を抱けるようにするためにの工夫であるのかもしれないが、「ナシヨナリズムに沿う形で発達」と言われても仕方がない一面もある。

## 八 小括（成果の考察）

機器が発達し、グローバル化が急速に進む令和の時代においては、先人の資質能力を読み解き、それを現代に生かすという手法が非常に採りにくくなっている。本稿で取り上げた久留島武彦で言えば、マイクも使わずに、「数百人、時に千人規模の子どもたち」を魅了する身体性は超人的ではあるのだが、現代人にとって理想的かといえば、必ずしもそうでない。そうした前提において、「久留島武彦」を見直したとき、現代においても重要であると思われる点が三点あった。

一つ目は、月並みではあるが、腰と肩、そして呼吸の重要性である。呼吸が、楽に、大きくなるよう、下腹で支え、胸を張る気分の状態に定めるということは周知のことであるように思われるが、学校教育でこれが徹底されているかと問われれば、そうではない。むしろ、一人一台端末の普及は子どもらの猫背・ストレートネックを悪化させているとすら思われる。

二つ目は、音声表現上の技術にとどまらない豊饒さが意図さ

れていたことである。久留島は「面白味」、「光彩」、「価値」、「調子」、「響き」、「誠意」、「真心」など、様々な言葉を用いて、それを表現しようとしていた。「手足を使ふことを避けやうとするよりは、如何にして身體全部を使用すべきかを考ふべきではあるまいか」（久留島、一九一六、五五頁）といったこともその現れにおいて容認される。「偽るべからざるところの赤裸々性」という言い回しも印象的である。

三つ目は、思想についてである。明確な道徳教育性とも言うべき特質は、賛否あるうが、教育に携わる者であれば、もっていなければならないものである。久留島の場合は、桃太郎主義と言われるものに相当する。いつの時代においても、心身の強さ・たくましさ、弱きものへの慈愛、他者と助け合う共同性は重要である。本稿に示したとおり、久留島は、「団体的訓練によるしつけや共同生活による共生感覚の育成を厳しく行うことに力点を置く硬派教育」を行っていたようである。また、軍国主義への加担が疑われることも理解の一つとして得ておきたい。本稿においては、日本少国民文化協会への関与からそれを示した。ただし、これをもって久留島を嫌悪したり、安易にその功績を否定するべきではない。「戦争」という特殊な状況下における個のあり方については、軽々しく良否を下せるものではない。

現在でも、久留島武彦生誕の地である大分県の玖珠町では、



「童話の里づくり」を掲げ、久留島武彦の教育精神を継承した「人材育成」を礎としている(注6)。そこでどのような教育活動が展開されているのか、今後、調査していきたい。

## 注

1 勢家肇には以下の著作等がある。『久留島武彦・年譜 童話の先覚者 日本のアンデルセン』(わらべの館久留島研究室、一九八六)、『久留島武彦著作集総目録』(自費出版、一九八九)、『童話の語り発達史』(勢家肇(編)・九州語り部実行委員会、海鳥社、一九九三)。その他、大分大学学術情報拠点図書館には、『久留島武彦資料研究』として、勢家によって収集された資料が三十巻(一九八六～一九八八年)にまとめられ、保管されている。

2 後藤惣一には、以下の論文の他、複数の著作がある。「久留島武彦の児童文化理念 その一考察」(後藤惣一、国語の研究、二七、二〇一頁、二〇〇二)、『久留島武彦 児童文化の開拓者』(後藤惣一、大分県教育委員会、二〇〇五)、『大分県先哲叢書 久留島武彦』(後藤惣一編、倉澤栄吉監修、大分県教育委員会、二〇〇四)

3 金成妍には、以下の論文の他、複数の著書がある。「巖谷小波と久留島武彦 久留島武彦を通してみる日本の口演童話史(一)」(絃説Ⅲ、一〇、一三〇～一四六頁、二〇一三)、「野

村徳七と久留島武彦 久留島武彦を通して見る日本の口演童話史(二)」(絃説Ⅲ、一一、九二～一一五頁、二〇一四)、「ボーイスカウトと久留島武彦 久留島武彦を通して見る日本の口演童話史(三)」(絃説Ⅲ、一二、一四九～一六五頁、二〇一五)、『久留島武彦が持ち帰った日本最古のモンテッソーリ教具 久留島武彦を通して見る日本の口演童話史(四)』(絃説Ⅲ、一五、一七一～一八三頁、二〇一八)

4 例示としてあげた三冊は『すずむし』(黒井健・絵、子どもの未来社、二〇二二)、『トラの子ウーちゃん』(篠崎三朗・絵、子どもの未来社、二〇二二)、『ともがき』(古内ヨシ・絵、子どもの未来社、二〇二二)として出版されている。引用もそれらに拠る。

5 「新桃太郎」の本文は『大分県先哲叢書 久留島武彦 資料集 第二巻』(大分県立先哲資料館編、二〇〇二)に拠る。同書によると、この「新桃太郎」は「ホーム」(二二号～二八号、明治四〇年三月～同年五月に発行)に掲載されていたようである。

6 玖珠町教育委員会による「令和五年度玖珠町教育行政の重点方針」を参照した。

## 参考・引用文献

大分県立先哲資料館編(二〇〇四)『大分県先哲叢書 久留島武

彦』大分県教育委員会

を受けての成果である。

金成妍（二〇一三）『巖谷小波と久留島武彦 久留島武彦を通して  
てみる日本の口演童話史（一）、敘説Ⅲ、一〇、一三〇〜一  
四六頁

（はなさかあゆむ／大分大学）

久留島武彦（一九一六）『通俗雄辯術』廣文堂書店

久留島武彦（一九二五）『子供に對する心得、雄辯學會編』雄辯  
學講座』聚英閣

久留島武彦（一九二八）『童話術講話』日本童話協会 ※引用は  
日本青少年文化センターによる復刻版（一九七三年）に拠  
る。

久留島武彦述・社會教育界編（一九三四）『新話術』社會教育界  
中村美和子（二〇一六）『戦後日本の口演童話研究の展開と課題、  
子供学研究紀要、四、九一〜一〇四頁

中村美和子（二〇一七）『戦時下の講演童話に見られる国策協力  
の検討―金沢嘉市による防空教育の話材を事例として、人  
間文化創成科学論叢、二〇、一五五〜一六三頁

中村美和子（二〇一九）『口演童話からストーリーテリングへ』  
子どもの発達を願う語りの水脈をたどる、子ども文化、  
四九（四）、一八〜二三頁

## 附記

本稿は JSPS 科研費 21K02428 及び JSPS 科研費 19K02735 の助成